

学会だより

◇ 常任幹事会議事録

開催日時：平成 20 年 9 月 27 日 14:00 より

開催場所：東京大学農学部

出席者：会長 長戸康郎，副会長 倉田のり，江面浩，伊藤純一，寺地徹，久保友彦，鳥山欽哉，佐藤豊，築山拓司，加藤謙司，長谷川博，小松田隆夫，田口文緒，安井秀，佐々英徳，久保山勉，中園幹生

各常任幹事からの経過報告後，内規「J. 日本育種学会会計に関する事項」の追加，内規「K. 科学研究費補助金の執行に関する特別会計に関する事項」の追加，「会計の実施細則」の制定，優秀発表賞の創設，内規「I. 日本育種学会優秀発表賞の選考に関する事項」の追加，日本育種学会功労賞受賞者の推薦，Breeding Science 特別号の発行，Breeding Science コンテンツライセンス，論文賞の編集委員からの推薦方法，日本育種学会 HP のリニューアルに関して討議を行った。

◇ 幹事会議事録

開催日時：平成 20 年 10 月 10 日 14:00 より

開催場所：滋賀県立大学交流センター研修室

出席者：会長 長戸康郎，副会長 倉田のり，喜多村啓介，久保友彦，鳥山欽哉，菅野明，半田裕一，矢野昌裕，江面浩，奥野員敏，新倉聡，木庭卓人，金子幸雄，吉田薫，穴戸理恵子，平田豊，佐藤豊，掛田克行，村井耕二，築山拓司，寺石政義，長谷川博，加藤謙司，佐藤和広，富田因則，安井秀，穴井豊昭，和田卓也，田浦悟，伊藤純一，寺地徹，小松田隆夫，田口文緒，乙部千雅子，久保山勉，佐々英徳，中園幹生（37 名）

委任状：佐野芳雄，三浦秀穂，原田竹雄，高畑義人，滝田正，岩田洋佳，渡邊和男，石坂宏，荻原保成，大村三男，松岡信，清水顕史（12 名）計 49 名

1. 各常任幹事経過報告

1) 総務（中園）

2008 年 9 月 25 日現在の会員数は 2,234 名であり，今年度に入り会員数が 55 名増加したことが報告された。

2) 科研費・農学会関係（伊藤）

平成 20 年度科研費研究成果公開促進費「学術定期刊行物」では 260 万円の交付を受けたこと，同科研費「研究成果公开发表（B）」では 80 万円の交付を受けたことが報告された。さらに，平成 21 年度の科研費申請については，編集幹事および 2009 年秋季大会開催校への作成依頼をしたことが報告された。農学会関連に関しては，育種学会担当者が平成 21 年度日本農学会シンポジウムの企画委員の一人になったことが報告された。さらに，7 月

29 日に開催された新法人化への対応シンポジウム－学協会の公益性の確立に向けて－の内容の報告があった。

3) ホームページ（寺地）

学会 HP のデザインのリニューアル案が提案された。

4) GMO 関連（江面）

5 月 7 日に GM 植物関連学協会連絡協議会，日本学術振興会産学協力総合研究委員会 160 委員会，178 委員会と内閣府との間で意見交換会を行ったこと，および，GM 植物関連学協会連絡協議会より「第 1 種使用規程承認組換え作物栽培実験指針改正案」についての詳細な意見（パブリックコメント）が提出され，その中に「日本育種学会 GM 作物対応ワーキンググループ」が賛同したことを記載していることが報告された。また，「日本育種学会 GM 作物対応ワーキンググループ」は現在 3 名（江面，矢野，大澤）の体制であるが，さらに 2 名を追加して，5 人体制で今後の問題に対応していきたいことが提案された。

5) 地域活動（各地域幹事）

北海道地区では，12 月 6 日に日本育種学会・日本作物学会北海道談話会を開催する予定であること（久保），東北地区では 8 月 26 日に弘前大学で東北育種研究会を開催し，参加者が 46 名であったこと（鳥山），中部地区では 11 月 29 日に平井篤志名城大教授が主催者として育種学会中部地区談話会を開催すること，北陸地区では 7 月 17，18 日に作物学会北陸支部・北陸育種談話会合同シンポジウムが開催されたこと（佐藤，村井），近畿地区では 6 月 7 日に京都工芸繊維大学で近畿作物・育種研究会を開催し，発表が 14 題，特別講演が 1 題であったこと（築山），中国・四国地区では 11 月 27，28 日に高知で四国談話会を開催予定であること，また，12 月 6 日に岡山大学資源生物科学研究所で山陽育種談話会を開催すること（加藤），九州・沖縄地区では 12 月 6 日に九州大学で九州育種研究会を開催予定であること（安井）が報告された。

6) 会計（長谷川）

平成 20 年度の会計の中間報告があり，内容の説明があった。

7) 英文誌編集（小松田）

2008 年の投稿・審査状況について，4 月から非会員も投稿できるようになり論文の投稿数，受領数が昨年と同時期と比べそれぞれ約 2 倍，約 1.3 倍増加していること，採択率が 6 割弱であること，2007 年のインパクトファクターが 1.079 になったことなどが報告された。また，2009 年 6 月に日本で開催される 6th International Triticeae Symposium の講演者に総説や原著論文の執筆依頼をし，麦類関係の編集委員で査読・編集作業を進め，BS 特集号として発行する計画が紹介された。さらに，EBSCO Publishing 社から Breeding Science のコンテンツライセン

シングの依頼があり正式契約が求められているが、情報が少ないために、詳細な情報を収集後、関係各位の意見を聞く予定であることが報告された。

8) 和文誌編集 (安井)

2008年の投稿状況について、2007年と比べ投稿数が多く、また、2006年と比べても同等かそれよりも多い投稿数であることが報告された。

9) 集会 (佐々)

今大会 (滋賀県立大) および 2009 年春季大会 (つくば国際会議場) 開催予定の報告があった。今大会より導入したオンライン参加登録の登録率は 84.4% (363 名) であること、2009 年春季大会に関する情報を今大会の休憩室等に掲示すること、締め切り後の UMIN による講演要旨の内容変更は受け付けないという注意喚起の掲示することが報告された。

2. 議事

1) 平成 20 年度日本育種学会賞選考について

学会賞等選考委員会 (倉田のり委員長, 喜多村啓介, 佐野芳雄, 矢野昌裕, 加藤謙司, 鳥山欽哉, 奥野員敏) および幹事会の議を経て次の 3 件を選定した。

◎谷坂隆俊 (京都大学大学院農学研究科): イネ有用遺伝子の探索・同定とゲノム多様化機構の解明

◎廣近洋彦 (独立行政法人農業生物資源研究所): イネ内在性レトロトランスポゾン *Tos17* の発見とその育種基盤利用への貢献

◎長野県農事試験場 オオムギ品種「ファイバースノウ」育成グループ (代表者: 牛山智彦): 高品質食用オオムギ品種「ファイバースノウ」の育成

2) 平成 20 年度日本育種学会奨励賞選考について

学会賞等選考委員会および幹事会の議を経て次の 2 件を選定した。

◎岩田洋佳 (独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構 中央農業総合研究センター): 育種学情報のデータマイニングと効率的解析のためのプログラム開発

◎藤野賢治 (ホクレン農業協同組合連合会): イネの高緯度地域への適応形質に関する遺伝・育種学的研究

3) 平成 20 年度日本育種学会功労賞選考について

常任幹事会, 幹事会の議を経て, 稲津厚生, 秋濱友也, 生井兵治, 中島卓介の 4 氏が, 平成 20 年度日本育種学会功労賞受賞者に選定された。

4) 内規「J. 日本育種学会会計に関する事項」の追加, 内規「K. 科学研究費補助金の執行に関する特別会計に関する事項」の追加, 「会計の実施細則」の制定について

内規に「J. 日本育種学会会計に関する事項」および「K. 科学研究費補助金の執行に関する特別会計に関する事項」を追加すること, それに伴い「会計の実施細則」を制定することが提案された。これに対して, 暫定予算と補正予算との違いを明確にすべきであるという意見が出され, 会計担当幹事より両予算の違いの説明があった。こ

れらの議を経て, 内規の追加, 細則の制定が承認された。

5) 内規「G. 日本育種学会論文賞の選考に関する事項」の改正について

各編集委員が「Breeding Science」および「育種学研究」から論文賞候補を各一編推薦し, 編集委員長がとりまとめて選考委員会に提出することが内規に決められているが, 実情に即していないので, 「Breeding Science」, 「育種学研究」の区別なく各編集委員が 2 編以内で論文賞候補を推薦できることになった。また, 「選考理由を付すことを義務にしない」, 「推薦論文がない場合にその理由を提示する必要がない」などが決定された。それに伴い, 内規「G. 日本育種学会論文賞の選考に関する事項」の改正案が提案され, 審議を経て以下の改正案が承認された。

◎現行内規: 「3) 編集委員は Breeding Science および育種学研究の中から論文賞候補として それぞれ 1 編 を編集幹事に 選考理由を付して推薦する。推薦論文がない場合もその理由を提示する。」

◎改正内規: 「3) 編集委員は Breeding Science および育種学研究の中から論文賞候補として 2 編以内 を編集幹事に推薦する。」

また, 論文賞受賞者に対する顕彰方法については継続審議となった。

6) 内規「A. 会の事業に関する事項」の改正

日本で開催される国際学会などを契機として BS 特集号の発行が決定されたことに伴い, 内規「A. 会の事業に関する事項」の「2) 学会誌として, 英文誌 Breeding Science (育種学雑誌) および和文誌育種学研究 (Breeding Research) をそれぞれ年 4 回発行し, (後略)」の発行回数部分を変更する必要があることから, 内規の改正案が提案され, 審議を経て以下の改正案が承認された。

◎現行内規: 「2) 学会誌として, 英文誌 Breeding Science (育種学雑誌) および和文誌育種学研究 (Breeding Research) を それぞれ年 4 回 発行し, その業務は各誌編集委員会が行う。英文誌編集委員会は編集委員長 1 名と編集委員約 20 名で構成され, 責任編集体制とする。和文誌編集委員会は編集委員長 1 名と編集委員若干名で構成される。」

◎改正内規: 「2) 学会誌として, 英文誌 Breeding Science (育種学雑誌) および和文誌育種学研究 (Breeding Research) を 原則としてそれぞれ年 4 回 発行し, その業務は各誌編集委員会が行う。英文誌編集委員会は編集委員長 1 名と編集委員約 20 名で構成され, 責任編集体制とする。和文誌編集委員会は編集委員長 1 名と編集委員若干名で構成される。」

7) 優秀発表賞の創設について

講演会における優秀な発表に対して日本育種学会優秀発表賞を授与し, これを顕彰することが提案された。それに伴い, 内規に「I. 日本育種学会優秀発表賞の選考に関する事項」の追加が提案された。最初の提案では幹事のみが投票権を持っていることになっていたが, 口頭発

表の選考については、座長にも投票権を与え、担当したセッションの優秀な発表に対して投票できるようになった。これらの議を経て、内規の追加が承認された。優秀発表賞の創設は会則第4条「(6) その他必要な事業」に該当するので、2009年春季大会から実施することになった。「優秀発表賞」の授与に関する会則の変更については2009年の総会での承認を目指すことになった。

8) 平成21年度秋季大会(第116回講演会・第52回シンポジウム)開催地について

同大会を北海道大学(大会委員長:佐野芳雄教授)で開催することが提案され、承認された。

9) 日本育種学会春季大会の開催地について

長戸会長より、慣例により日本育種学会春季大会は関東地区の大学で開催されてきたが、関東地区の大学の負担が大きいため、春季大会開催地を関東地区にこだわらないことが提案され、承認された。

3. 関連報告

1) シンポジウム委員会(平田)

本大会では、10月11日午後の50回記念シンポジウムで2課題、10月12日午後のシンポジウムで4課題のシンポジウムが開催されることが紹介された。また、2009年春季大会(日本作物学会との合同大会)におけるシンポジウムの課題の公募案内を今大会の講演要旨集に差し込み、会員に広く募集したことが報告された。

2) 男女共同参画についての活動状況(吉田)

3月に開催された女子高校生春の学校「ジュニア科学塾」に協力したこと、10月7日に京都大学で開催された第6回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムにポスター発表をしたこと、春季大会に引き続き本大会でも保育室が設置され5件の申し込みがあったことが報告された。

3) 記者レク報告(矢野, 伊藤)

10月1日にマスコミ9社に対して4件の学会発表課題の記者レクを行ったこと、日経産業新聞、朝日新聞、毎日新聞、日本農業新聞、山陽新聞などに記事が掲載されたことが報告された。

4) JABEE関係(平田)

平田豊、丸橋亘、富田因則の3氏がJABEEの農学一般関連分野の審査員となる予定であることが報告された。

5) 英文誌編集幹事から、各地域活動で報告した査読付き論文をBreeding Scienceに投稿するケースがあったことが報告され、このような場合は受領しないので注意してほしいという依頼があった。

◇ 日本育種学会第114回講演会選定課題記者会見報告

会見日時:平成20年10月1日(火曜)11:00~12:30

会場場所:学士会分館(東京都文京区本郷7-3-1(東京大学構内赤門隣))

出席者:幹事長 矢野昌裕, 庶務幹事 伊藤純一

参加報道機関:毎日新聞, 朝日新聞, 東京中日新聞, 産経新聞, 日刊工業新聞, 日本経済新聞, 日本農業新聞, 化学工業日報, 科学新聞社の計9社(9名)

平成20年10月11日(土曜), 12日(日曜)に滋賀県立大学(滋賀県彦根市)で開催された日本育種学会第114回講演会の講演課題(計296課題)の中から常任幹事によって選定された以下の4課題について、記者会見を実施した。

【記者会見課題】

(1) 講演番号:706「オヒルギの塩応答性遺伝子を導入したシロイヌナズナの解析」多田雄一¹・深山真史^{1,2}(1. 東京工大大応用生物, 2. 産総研バイオニクス)および講演番号:P056「*Agrobacterium*を宿主とした耐塩性スクリーニングで選抜したオヒルギ遺伝子を導入したシロイヌナズナの解析」江澤祥太¹・多田雄一²(1. 東京工大バイオ情報メディア, 2. 東京工大大応用生物)

(2) 講演番号:P028「イオンビーム突然変異誘発技術を利用した少肥料栽培向きイネの作出」日野耕作¹・片山寿人¹・北村治滋¹・川村容子¹・中川淳也¹・吉田貴宏¹・森真理^{1,2}・仙波俊男¹・長谷純宏³・田中淳³(1. 滋賀農技セ, 2. 現滋賀県庁, 3. 原子力機構)

(3) 講演番号:P051「水稻穂ばらみ期耐冷性遺伝子*Ctbl1*の単離」斉藤浩二・早野由里子・黒木慎・佐藤裕(北海道農研)

(4) 講演番号:P118「宇宙環境で生育する大麦のストレス応答・防御遺伝子の発現」Shagimardanova Elena¹・杉本学¹・Gusev Oleg²・Bingham Gai³・Levinskikh Margarita⁴・Sychev Vladimir⁴(1. 岡山大資生研, 2. 農業生物資源研, 3. ユタ州立大スペースダイナミック研, 4. ロシア科学アカデミー生物医学研)

それぞれの課題について発表者に説明用レジュメを作成していただき、それに基づいて矢野と伊藤が説明し、質疑応答を行った。記者会見後、講演番号706およびP056の記事が、日経産業新聞(10/8)に掲載された。講演番号P028の記事が、日本農業新聞(10/2)、日経産業新聞(10/16)および科学新聞(10/17)に掲載された。講演番号P051の記事が、日経産業新聞(10/2)および化学工業日報(10/3)に掲載された。講演番号P118の記事が、毎日新聞(10/2)、毎日.jp(10/2)、朝日新聞夕刊(10/6)、asahi.com(10/6)、日経産業新聞(10/6)および山陽新聞(10/10)に掲載された。

◇ 農林水産研究に係る委託プロジェクト研究の21年度概算要求(新規・拡充)内容のお知らせ(農林水産省農林水産技術会議事務局)

農林水産省農林水産技術会議事務局では、農林水産政策上重要な研究のうち、①我が国研究勢力を結集して総合的・体系的に推進すべき課題、または②多大な研究資

源と長期的視点が求められ個別の研究機関では担えない課題について、委託プロジェクト研究として実施しています。

現在 21 年度予算において、以下の 3 課題について新規・拡充要求しているところです。

年末に予定されている概算決定後、速やかに研究実施機関の公募手続きを開始することとしています。なお、本委託プロジェクト研究には、一定の条件を満たす企業、公益法人、独立行政法人、大学、地方公共団体等の法人格を有する研究機関が応募することができます。

○低コストで質の良い加工・業務用農産物の安定供給技術の開発（拡充）【H18～22年度】拡充部分「米粉利用を加速化する基盤技術の開発」

○地域内資源を循環利用する省資源型農業確立のための研究開発（新規）【H21～25年度】

○生物の光応答メカニズムの解明と高度利用技術の開発（新規）【H21～25年度】

なお、上記は、概算要求時点のものであるため、今後変更等があり得ますことをご承知おきください。詳細については、Web ページ <http://www.s.affrc.go.jp/docs/project/2009/project2009_guidance.htm> をご参照下さい。

【お問い合わせ先】

農林水産省 農林水産技術会議事務局 研究推進課
青井・水谷・山口
TEL: 03-3502-7438 (直通)
FAX: 03-3593-2209
E-mail: kikaku2@s.affrc.go.jp

集会の案内

◇ 第 19 回 SHITA シンポジウム「植物工場のニューウェーブ“ビジネススキームとイノベーション”」

開催日時：2009 年 1 月 23 日（金）10 時～16 時（講演会）、
16 時 15 分～18 時 15 分（懇親会）

会場：中央大学駿河台記念館（東京都千代田区神田駿河台 3-11-5）

主催：日本生物環境工学会 植物工場部会（SHITA）

プログラム：

10:00～10:05 学会長 挨拶 村瀬治比古（日本生物環境工学会長）

10:05～10:45 「培土を用いた多段式植物工場の可能性」
藤原澄久（丸紅株） ビジネスインキュベーション部
課長）

10:45～11:25 「農業の工業化におけるパイオニアを目指して！～フェアリーエンジェルのビジネスモデル～」
江本謙次（フェアリーエンジェル株） 社長）

13:00～13:40 「データに基づく計画生産の実現と大規模イチゴ植物工場～元電子技術者の挑戦と植物工場への期待～」 倉本強（布引施設園芸組合 組合長）

13:40～14:20 「静電場スクリーンを用いた病虫害の防除戦略」 豊田秀吉（近畿大学農学部 教授）

14:40～15:20 「サブウェイチェーンができる野菜生産者へのメッセージ～生産者から店舗へ顔の見える野菜流通の確立を目指して～」 伊藤彰（日本サブウェイ株） 社長）

15:20～16:00 「施設園芸の現状と課題」 及川仁（農林水産省生産流通振興課 課長補佐）

案内書、参加申込用紙が必要な方は下記の E-mail または FAX でご請求ください。また、Web ページ <<http://shita.jp/sympo/>> にも案内があります。

E-mail: sympo@shita.jp FAX: 055-968-1156 植物工場部
会事務局 柴田宛

研究助成公募の案内

◇ 財団法人タカノ農芸化学研究助成財団 平成 21 年度研究助成対象者募集要領

本財団は、農学、特に農芸化学（生物資源等）に関する学術研究を助成し、もって学術研究の発展に寄与することを目的とし設立されました。本年度も、農芸化学等に関する研究を行っている大学等の研究機関の研究者に対し、研究助成金を交付いたします。特に、若手研究者への助成の枠を設け、今後の当該分野の研究促進に役立ちたいと考えています。平成 21 年度は、次の要領で助成対象者を募集いたします。

1. 研究課題：(1) 穀類並びに豆類の栽培・育種に関する研究、(2) 穀類並びに豆類の品質・成分並びに栄養生理等に関する研究、(3) 穀類並びに豆類の利用及び加工技術に関する研究、(4) 納豆菌等微生物の特性・生成酵素等に関する研究
2. 研究助成対象者：(1) 大学及び短大の研究者（大学院生も含む）、(2) 国立試験研究機関の研究者、(3) 公立試験研究機関の研究者、(4) その他本財団が適当と認めた研究者
3. 助成金額：一般研究者 1 件 70 万円を 4 件程度、若手研究者 1 件 30 万円を 4 件程度（昭和 44 年 4 月 1 日以降に生まれた者）
4. 交付時期：平成 21 年 5 月予定
5. 申請手続き方法：当財団所定の申請用紙に必要事項を記入し、平成 21 年 3 月 20 日（必着）までに郵送願います。尚、申請書用紙は、タカノフーズ株ホームページ <http://www.takanofoods.co.jp/> 内【タカノ財団について】からダウンロードできます。または、E-mail にお問合せいただけましたら、書類を添付して返信いたします。
6. 申請書請求先及び送付先：〒 311-3411 茨城県小美玉市野田 1542（財）タカノ農芸化学研究助成財団
TEL: 0299-58-4363, FAX: 0299-58-3847
E-mail: tazaidan@takanofoods.co.jp

7. その他：同一研究課題で、他の団体等へ応募され、かつ、本年度重複助成となられた場合には、助成をできない場合がありますのでご注意ください。

談話会だより

◇ 東北地区

東北育種研究集会

第3回 東北育種研究集会が、2008年8月26日(火)に弘前大学農学生命科学部において開催されました。参加者は7研究・教育機関からの総勢46名、ポスター発表は19課題となりました。

日本育種学会の地方会員の交流による学会活性化として始められた研究集会は、以前作物学会の支部会に併せて行われていましたが、再開して3年目になりました。

今回は、青森県の研究組織に所属する学会員から2課題の講演をいただきました。1つめは、青森県農林総合研究センター青森県りんご試験場 赤田朝子研究管理員「青森県りんご試験場におけるりんごの育種」、2つめは青森県農林総合研究センター畑作園芸試験場 長谷川一場長「青森県における野菜育種への取組」についてでした。りんご育種については、その時々々の育種目標についての推移から、現在の有望系統がどのように育成されてきたかについての講演でした。過去の育種記録から掘り起こされた交配組み合わせ、選抜系統数などをもとにどのような育種から品種が生み出されていったかについて詳細な資料を解説していただきました。野菜育種については、地方における品種育成の過程とその成果について、データをもとに地方に適した品種育成を地方育種機関が担っていることをお示しいただきました。

討論では、地方の課題を持っている育種研究機関と教育・研究機関である大学との連携についての課題がだされ、弘前大学生物共生センター金木農場が青森県と進めているナガイモ原種保存についての取り組みがだされ、その後も懇親会においても大学院生の紹介からそれぞれの研究室の取り組み状況など和やかな雰囲気でも懇親が深められました。

今回の育種学会員の連絡では、中西印刷のご協力もありメールリスト(中西印刷からの発送にて、返信を事務連絡担当の石川隆二に返信)により、簡易・安価に行うことができました。このような連絡網の整備は地方における育種学会員の連携に欠かせないものになりそうです。

ポスター発表：1. オオムギ *RGP* 遺伝子の単離と解析。遠藤史也・木藤新一郎(岩大・農)、2. セルラーゼ過剰発現イネの作成と解析。伊藤幸博(東北大院・農)、3. *OsWRKY11* を *HSP101* プロモーターで過剰発現させた形質転換イネにおけるマイクロアレイ発現解析。呉暁嵐・藤井壮太・伊藤幸博・鳥山欽哉(東北大院・農)、4. イネ胚乳タンパク質のプロテオーム解析。阿部利徳・KAMARA J.S.・星

野美樹(山大・農)、5. ダイズとツルマメの *RIL* におけるサポニン含量および裂莢性の変異。堀江幸生・塚本知玄・王克晶・横井修司・高畑義人(岩大・農)、6. プナにおける *R2R3-MYB* ファミリーの解析。松田修一¹・赤田辰治²(1. 岩手連大、2. 弘大遺伝子)、7. マメ科植物における *WUS/WOX* 遺伝子群のクローニングとその組織特異的発現の解析。上西園崇文¹・赤田辰治²(1. 弘大農生、2. 弘大遺伝子)、8. 赤毛から得られた半矮性個体の遺伝解析。磯祥子・今井克則・石川隆二(弘大農生)、9. イネ・ナショナルバイオリソースにおける葉緑体ゲノムの多様性。ハオ イン・石川隆二(弘大農生)、10. 弘前在来トウガラシ「清水森ナンバ」の果実形態の特性。本多和茂・相馬志穂・嵯峨絢一(弘大農生)、11. リンゴにおける *PTR* (Phloem Transport RNA) 解析。岩谷朋美¹・中園幹生²・原田竹雄¹(1. 弘大農生、2. 東大院 農生)、12. イネにおけるアソシエーションマッピングで特定したインド型-日本型分化領域の特性解析。今井克則・本多剛志・石川隆二(弘大農生)、13. 黄ダイズおよび着色ダイズ種皮における *CHS* 遺伝子プロモーター領域のメチル化解析。松本拓郎・葛西厚史・千葉紘子・藤森桂・小野泰一・千田峰生(弘大農生)、14. 赤毛から得られた貫性変異体、*epd* の遺伝解析。成田真矢・今井克則・石川隆二(弘大農生)、15. 日印交雑後代で出現した易変異系統における極矮性個体の特性解析。大山克之・今井克則・石川隆二(弘大農生)、16. 新規伴細胞特異的プロモーターの単離とセイヨウナタネ維管束における一過的発現系を利用した強化型プロモーターの開発。津和本亮・原田竹雄(弘大農生)、17. インド型-日本型品種の遺伝的多様性に関する評価。本多剛志・ハオ・イン・石川隆二(弘大農生)、18. トルコギキョウの遺伝子組換えによるアントシアン及びフラボノール含量の改変。柳野利哉(青森農林総研グリーンバイオ)、19. *Brassica rapa* における種間不和合性に関する *QTL* 解析。宇田川久史¹・石丸洋次²・李鋒²・北柴大泰²・西尾剛²(1. 東北大・農、2. 東北大院・農)

原田竹雄・石川隆二・千田峰生
(弘前大学農学生命科学部生物資源学科)
赤田辰治(弘前大学遺伝子実験施設)

◇ 中部(北陸)地区

北陸育種談話会

北陸育種談話会は日本作物学会北陸支部と合同で、2008年7月17日、18日の二日間、富山県民会館において第45回講演会・シンポジウムを開催した。シンポジウムでは、「イネを取りまく最近の話題」のテーマで、「世界の米需給動向と我が国米生産の対応」酒井富夫(富山大学・極東地域研究センター)、「北陸の米に求めるもの」藤尾益造((株)神明)、「バイオエタノール用イネの現状と課題」三浦清之(北陸研究センター・稲育種研究室)、「水田を活用した飼料生産」金谷千津子(富山県農林水産

総合技術センター・畜産研究所)の発表があった。一般講演では、33課題の発表があった。参加者は約70名で活発な議論が行なわれた。また、今年度は、新潟県農業総合研究所作物研究センターのコシヒカリBL新潟シリーズ育成グループの「全県レベルで普及したコシヒカリ新潟BLシリーズの育成に関する功績」について、功労賞が授与された。今回の総会において、これまでの日本作物学会北陸支部・北陸育種談話会の名称を「北陸作物・育種学会」に変更することが認められた。それに伴って、毎年度末に発行される「北陸作物学会報」(2008年で第43号)の名称が「北陸作物・育種学会報」と変更される予定である。

村井耕二(福井県立大学生物資源学部)

◇ 近畿地区

近畿作物・育種研究会

近畿作物・育種研究会第165回例会および総会が、2008年6月7日(土)に京都工芸繊維大学嵯峨キャンパスにおいて開催されました。例会では、特別講演1題に加え、以下の14題の一般講演がありました。総会では、新しい執行部が承認されました(吉田元信会長・近畿大学)。また、機関誌「近畿作物・育種研究」の誌名を2008年度発行の53号より「作物研究(英文名Journal of Crop Research)」と改めました。2008年8月1日(金)には、初めての試みとして、京都府農業総合研究所において第1回現地検討会を行いました。

一般講演: ①シイタケによる β -O-4型リグニンモデル化合物の分解。古地玲規・佐伯奈緒美・種坂英次・吉田元信(近畿大農) ②短時間補光によるスプレーギク花色変化の誘導。堀端章(近畿大生物理工) ③サツマイモ *Ipomoea batatas* の交雑育種による有用形質の作出。井上尚樹・種坂英次・吉田元信(近畿大農) ④黄ダイズ育種に利用可能な発芽時冠水抵抗性遺伝子の同定。平田香里¹・吉川貴徳¹・中崎鉄也¹・奥本裕¹・広田直子¹・R.Govinda¹・佐山貴司¹・小松邦彦²・築山拓司¹・谷坂隆俊¹(1. 京都大院農, 2. 九州沖縄農研セ) ⑤ *mPing* 配列を含んで転写される遺伝子の同定。稲垣晴香・築山拓司・門田有希・Shanta Karki・奥本裕・中崎鉄也・寺石政義・谷坂隆俊(京都大院農) ⑥ B および Ca 遮断処理がイネの種子稔性におよぼす効果。山本匠・奥本裕・于占芹・谷坂隆俊(京都大院農) ⑦ *mPing*-SCAR マーカーを用いた早生突然変異遺伝子 *se14* および *se15* のマッピング。浅見武人・奥本裕・齋藤大樹・袁清波・門田有希・谷坂隆俊(京都大院農) ⑧ 乾燥ストレスによりウメの葉組織で発現するタンパク質のプロテオーム解析。花田裕美¹・橋本広祐¹・根来圭一¹・林恭平¹・永井宏平¹・池上春香¹・森本康一¹(1. (財)わかやま産業振興財団, 2. 近畿大生物理工) ⑨ 生育情報測定装置を用いた水稻の籾数予測。尾崎耕二・河瀬弘一(京都府農総研) ⑩ 京都府丹後地域における水稻「コシヒカリ」の疎植栽培と穂肥施用量が収量および

玄米外観品質に及ぼす影響。大橋善之¹・吉岡善晴¹・安川博之¹・中村一友²(1. 京都府丹後農研, 2. 京都府丹後農改普セ) ⑪ 登熟期における玄米へのカドミウム蓄積過程の品種間差異。井関洸太郎¹・秋田重誠²(1. 京都大院農, 2. 元 滋賀県立大環境) ⑫ 2007年産丹波黒大豆に多発した裂皮について。岡井仁志・寺嶋武史・杉本充・河瀬弘一・稲葉幸司(京都府農総研) ⑬ 「丹波黒」の生産変動要因に関する研究。第2報 丹波地方4集落間の収量および環境変異。御子柴北斗¹・本間香貴¹・須藤健一²・牛尾昭浩²・岡井仁志³・尾崎耕二³・白岩立彦¹(1. 京都大院農, 2. 兵庫県立農水技総セ, 3. 京都府農総研) ⑭ 大気 CO₂ 濃度と生物的窒素固定の相互作用がダイズの種子生産に及ぼす影響。及川真平¹・宮城佳明²・彦坂幸毅²・衣笠利彦³・松波寿典⁴・岡田益己⁴・国分牧衛⁵・広瀬忠樹⁶(1. 京工織大生物資源フ, 2. 東北大院生命, 3. 鳥取大農, 4. 東北農研セ, 5. 東北大院農, 6. 東農大国際食料)

特別講演: 植物の光合成と水チャネル。半場祐子(京都工織大生物資源フィールド科学教育研究センター)

築山拓司(京都大学大学院農学研究科)

日本育種学会会員異動(2008.7.21~2008.10.20)

- ◇ 普通会员入会: 佐山貴司(北海道), 佐藤(永澤)奈美子(秋田), 根本泰江(茨城), 野水利和(新潟), 白岩立彦(京都), 増田優(広島), 星野友紀(佐賀)
- ◇ 学生会員入会: 荒瀬幸子, 川崎翔太, 佐藤由佳(北海道), 三木香織(東京), 上野まりこ, 加藤舞, 竹中祥太郎(京都), 吉岡拓磨(兵庫)
- ◇ 外国会員入会: 申東勳(大韓民国)
- ◇ 外国団体会員入会: SANGJI UNIVERSITY LIBRARY(大韓民国), The Library of Southwest Normal University(中華人民共和国)

住所変更等

- ◇ 普通会员: 黒田洋輔, 藤井弘毅(北海道), 副島淳一, 中村和弘(岩手), 風間智彦(宮城), 太田久稔, 大木信彦(茨城), 榎宏征, 土井一行(愛知), 荒木良一(大阪), 山田昌彦(長崎), 井辺時雄(熊本), 外山潤(宮崎), 田中淳一(鹿児島), 山中慎介(沖縄)
- ◇ 学生会員: 岡本美貴(宮城)
- ◇ 外国団体会員: Agriculture College of Yanbian University, Tianjin Academy of Agricultural Science, Inner Mongolia University of Agriculture, Institute of Scientific & Technical Information of Shanghai, Institute of Scientific & Technical Information of Shanghai, Jilin Agricultural University Library, Northeastern Agricultural University Library, Science Documentation & Information Centre Library Chinese Academy of Agricultural Sciences, Shenyang Agricultural University Library, South China Botanical

Garden, Soybean Research Institute Nanjing Agricultural University, The Library of Anhui Agricultural University, The Library of Jiangsu Academy of Agricultural Sciences, The

Library of Yunnan Agricultural University, Wuhan University Library, Zhejiang Academy of Agricultural Sciences (中華人民共和國)